

棚田 ライステラス

第8号 1997.11.25

(季刊・年4回発行)

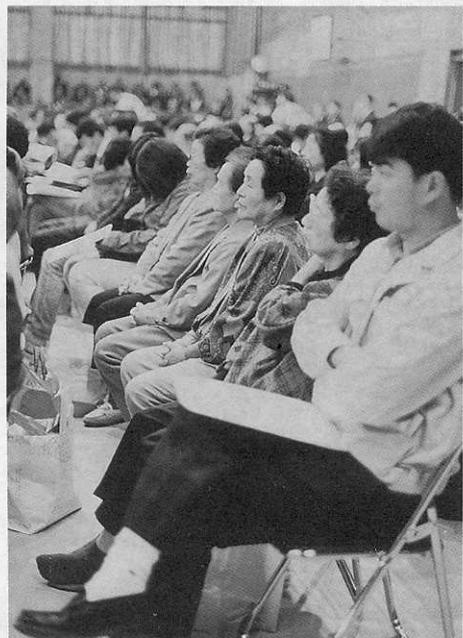
発行／全国棚田(千枚田)連絡協議会

連絡協議会

編集／ふるきやらネットワーク 石井里津子

〒169 東京都新宿区百人町1-23-29-202

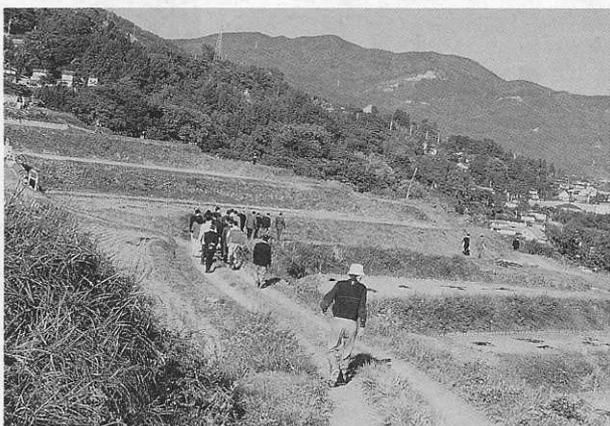
TEL 03-5389-9937/FAX 03-5389-9983



►特集◀

第3回 棚田(千枚田)サミット

「棚田・いま時代と共に 国民理解を求めて」



直接所得補償制度の導入、農村と都市とのさらなる交流、環境保全型農業を求めて

秋空が青く抜け渡った10月15、16日、第3回全国棚田（千枚田）サミットが長野県更埴市で開催されました。「棚田・いま時代と共に 国民理解を求めて」をテーマに、自治体や研究者、個人など1000人を超える人々が集まり、議論し交流する場となりました。

第3回ともあって、参加者たちのつながりが生まれてきた中でのサミット開催となり、棚田への関心が少しずつ高まっている気運を感じるばかりでなく、個々の情報交換やネットワークづくりにも拍車がかかった集いとなったと思われます。

開催地である長野県更埴市は、芭蕉が、水の張った田に映る月をめで、「田毎の月」を詠んだ棚田のあるところ。早朝からの棚田見学ツアーにも大勢の参加者が、あぜ道を歩き、オーナー制度の話などに耳をかたむけていました。

今回は、行政や研究者などによる「棚田保全」のための新たなる付加価値や利用法を模索するサミットという印象でした。これを布石に今後、現場や個人の声が混ざり合い、新たなる出会いやつながりを生み出しながらさらなるステップアップが期待されるサミットとなりました。



個人会員の集い

棚田への思い、日々に

今回新たに設けられた個人会員の集いをレポート

今回のサミットでは、個人会員たちがそれぞれの棚田への熱い思いを語り合い交流を深め、ネットワークをつくろうという気運が生まれはじめました。さまざまな立場から新たな提案やユニークな発案が出るだけにとどまらず、会員同士がもっと積極的に活動する場づくりを求める声が強く、今後の棚田連絡協議会そのものの積極的な活動展開を期待する方向性にまとまっています。

15日に開かれた個人会員の集いには、約40人が出席。老若男女、都會から農村から、農家も行政も一般市民もさまざまな職業の多彩な人々が顔を揃えました。現段階で個人会員は82名。「点から線へ」と活動のつながりや拡がりの必要性が語られ、情報交換を切に願う声が多く聞かれました。

都市からは、オーナー制度を利用し棚田で稻作体験をはじめた人、棚田の景観の美にひきつけられ、何か自分にもできないかと会員になつたという人など、肩のはらない自らの足元から棚田を考えようとする流れがあり、一方、農村や地域からは、実際に棚田をつくっている人、行政マンとして補助整備事業の

今村 奈良臣 氏

農政審議会会长、
日本女子大学教授

「棚田を通して 二十一世紀の 食料・農業・農村 を考える」



農業や地域に対するひとかたならぬ思いがひしひしと伝わつてくる基調講演でした。まずは「6次産業」への提案。「1次産業、2次産業をあわせた6次産業をつくり出さねばならない。産業の加工やサービスの部分を他者に渡さずに、1次も2次もひつくるめたのが本来の農業経営だったはずだ。それを取り戻すことが必要」と力説。

「とにかく間地は平地より、加工や販売までをセットにしたものづくりが息づく。知恵、企画力、組織力をもつた人の育成が必要と考え、「村づくり塾」をやっている」とその例も交え

ながら話は進められました。
付加価値をつける、それも企画力のひとつと次のようなユニークなアイデアを語ってくださいます。

▼「四季折々の美しさを見せてくれる棚田を後世に残すアイデアを考えたい」
▼「ルワンダへ米を送るNGO活動をしているが、棚田米を使つて援助し、棚田米を世界に広めたい」

▼「土地改良整備の仕事をして21世紀の花形産業にしたいと、過疎を恐れないこと。自信がない、未来がないという心の過疎の方がもつと恐ろしい。「自分はこれだけやつた」という声を来年のサミットでは聞きたい」と最後をしめられました。

担当者など現場のシビアな声も出てきました。中島峰広早稲田大学教授からも「来訪者と居住者の2者の立場から論議を重ね、棚田の今後のあり方を模索していくことが大切」との提案もなされました。

以下、いくつか発案や意見をピックアップして紹介しておきましょう。

▼「農林業での廃棄物活用を研究中。棚田の水を組み上げるとき、石油を使わずにモミ殻を燃やした動力を用いてはどうか」
▼「棚田耕作者。棚田を特別視すべきでない。棚田を通じ農業そのもののあり方を考えるべき」

▼「四季折々の美しさを見せて棚田を守らないと、将来国土が流れてしまうのではないか」
▼「自然景観の中で、田んぼが一番きれいと写真を撮り続けている。田んぼと里山がつながっていないと、たくさんの生物も破滅してしまう。ひいては日本の破壊につながる」
▼「全国に棚田に思いを抱く大勢の人がいるのだから、田植えや稻刈りを南の方からリレーしたらどうだろうか」



パネラー：

石塚克彦 劇団「ふるさときやらばん」脚本・演出家
岸 ユキ 女優
田中夏子 棚田オーナー、長野大学助教授
水谷正一 宇都宮大学教授
宮坂博敏 更埴市長
吉永健治 農水省農業総合研究所ヨーロッパ研究室長



それが棚田の魅力、棚田とのかかわり、保存や活用のアイデアを出したパネルディスカッションとなりました。棚田が地域や地方の生活文化と密接であることを確認しあい、そのためにも地方行政の果たす役割は大きく、地方分権が必要になつてくると結論が導き出されています。

更埴市長・宮坂博敏氏からは、更埴での「棚田貸します制度」が述べられ、設備を整えていく話が出ました。さらに、そして棚田を借りて棚田オーナーとして棚田米をつくっている田中

やつべきはじめたけれどもリピーターを考えることが次。そのために地元が、足元の地域文化を大切にしていくことが必要」と語っています。

ふるさときやらばんの脚本・演出家の石塚克彦氏からは、「つ

夏子さんは、「都市のいやしの場として位置づけられるので、棚田農家は不本意ではないか。棚田は、市場の論理から距離を置くことを教えてくれた。だからこそ市場のベースにおける暮らしのリズム、生産のあり方を考えたい」。

女優の岸さんも「棚田に人が

くり手がないと荒廃する。つくり手の確保が大切。都会の人たちや子ども、若者たちが棚田や農業に触れる機会を設けることが必要ではないか。そのためにも都市で美しい棚田の巨大パネルの写真展などの仕掛けを考えはどうだろうか」と提案が出ました。

一方、農水省農業総合研究所の吉永健治氏は、ヨーロッパにおける景観、風景に対する意識の高さを述べ、日本でもこうした理解を求めていくことを語っています。そのためにも国と地方行政の両者から地域にあつた対策が必要で、保存と活用のためにも、棚田を軸に地域全体を博物館に見立てていく提案をしています。

また、宇都宮大学の水谷正一教授は、東南アジアでの例をあげながら、「棚田での労働は、機械に頼れないゆえ人工エネルギーが非常に少ない。これは棚田の再評価すべき点ではないか」。また、農業基本法で環境や国土保全の必要性が打ち出されれば棚田の整備へとつながるのではないか」というコメントも出ました。

それぞれの立場から見えた棚田の今後のあり方。次に、具体的な展開を繰り広げるための問題点がうまく整理されました。

くり手がないと荒廃する。つくり手の確保が大切。都会の人たちや子ども、若者たちが棚田や農業に触れる機会を設けることが必要ではないか。そのためにも都市で美しい棚田の巨大パネルの写真展などの仕掛けを考えはどうだろうか」と提案が出ました。

特別講演

岸 ユキさん（女優）

日本文化を育てたい



岸ユキさんが舞台にあがるとさあっと空気が明るくなりました。ゆっくりと、そしてはつきりとしたやわらかな語り口。自らの農業や自然との出会い、農業体験、夫と耕す畑仕事の話へ。岸さん自身が感じた農業や自然とともににある生活の豊かさ、ありがたさが語られました。「日本文化は、生活の中にある」という言葉が印象的でした。「自分の住む土地でとれたものを時期にあわせていただく。そんな日本文化を育てることが大切」と語ってくださいました。



▲長野県更埴市おばすて地区の「棚田貸します制度」の棚田を見学するサミット参加者。

「信州の棚田ものがたり」

ふるさときやらばん編
B5判136ページ
1500円(税込)

お問い合わせ、お申し込みは
ふるさとネットワーク
TEL 03-5389-9937
FAX 03-5389-9983



ページをめくると次々に美しい棚田のカラー写真が並びます。アルプスの銀峰をバックに新緑の農村風景、信州の紅葉深まる農村のたたずまいの中に写しだされた棚田など130点もの写真をぜいたくにちりばめた本になりました。

棚田サミットに集まつた他県の人たちからも「ふるさとの田んぼを改めて見直す気持ちになるね、田んぼのぬくもりが伝わってくる本」と大好評でした。

この本は、長野県内80箇所を取材してまとめた本です。それだけに、水田に引く水を得るために分水嶺を越えてまで水を運ぶ水路をつくったという話やわが家の棚田の歴史など農家の声がつぶさに語られています。

また棚田を現代に蘇らせようと地域を動かし、土地改良や作物の工夫を続ける人々の「棚田の英雄」ともいべき姿をレポートしています。

足で稼いだだけに緻密な情報だけでなく、棚田をめぐる現代の息吹がハートに迫つてくる本です。

(取材スタッフ 劇団ふるさときやらばん荒木恵美記)

信州の棚田
The Terraced Rice Field of Shinshu
ふるさときやらばん

ふるさときやらばん編
B5判136ページ
1500円(税込)

お問い合わせ、お申し込みは
ふるさとネットワーク
TEL 03-5389-9937
FAX 03-5389-9983

雪国文

化村構想

全町70・23kmですが、「雪国文

化村構想」をたて、公園的イメ



安塚町
矢野 学

町長に聞く「第4回、どんな

棚田サミットを考えていますか?」

一級で町づくりを行つてきていて
ます。雪国の棚田は、水のため
方なども独特で棚田の条件がよ
く、いまも生活の場として棚田
は息づいています。現在、生産

の場としての棚田は500町
歩。荒れ地となつた棚田が私ど
もの町にもあります。棚田の環
境保全や国土保全の意味からも
よみがえらせるのはもちろん、
美しい農村としての景観も守つ
ていきたのです。

そのためにも、サミットに向
けて、早急に意見を聞く会を設
けたいと思っています。都市の
個人会員のみなさんや町民も参
加して、さまざまな提案を出し

ます、景観としての棚田を考
えていきたいのです。わが町は
もう一方で、私たちの町の棚田
は生産の場としての棚田ですか
ら、その再生のためにどんなこ
とができるか、みなさんに参加
してもらつて提案してもらいた
い。しかも楽しく。そんなサミ
ットにしたいと思っているので
す。アトラクションも一般市民
参加型で棚田ミュージカルなん
かができるといいですよ。

棚田の保全・利活用の促進を
目的とした棚田地域等保全対策を
新たに要求しています

てもらおうと考えています。で
きれば、第4回サミットでは、
みんなが参加できるような分科
会を10ほどつくりたいのです。
サミットで、町民もが参加し
て安塚の棚田をどうやって生か
していくか、考えていきたい。

棚田地域の特性を生かすこと
ができるきめの細かい保全整
備を行うハード事業と、棚田
の保全・利活用や棚田地域の
集落との交流に関心を有する
都市住民が積極的に参加して
行う持続的な保全・利活用活
動を支援するソフト事業の新
たな創設を要求しています。

これらの事業は、緊急に取
り組む必要があることから、
ウルグアイ・ラウンド対策費
を活用し、平成12年度までの
3年間で集中的に実施します。

なお、このほかにも文化庁
との連携により、棚田の文化
的価値の保全・活用と農業・

農村の活性化に関して調査・

検討を行うための経費を要求
しています。

第4回 棚田サミット開催地は、
新潟県安塚町に決定!



矢野 学 町長

時事解説

「予算要求のこと
詳しく述べ下さい」

もつと

棚田の保全・利活用の促進を
目的とした棚田地域等保全対策を
新たに要求しています

棚田地域等緊急保全対策事業 (平成10年~12年度:事業費300億円)

- 地区毎に棚田等の保全プランの策定等
- 速効性のある緊急保全整備工種(ハード)を原則1年間で実施
- 多様な地域状況に対応したきめ細かな保全対策の実施

棚田地域水と土保全基金事業 (平成10年~12年度:基金造成240億円)

- 都道府県に基金を造成し、棚田の保全・利活用の持続的支援体制を整備
- 棚田保全の輪への市民参加の促進
(寄付金受け入れ、ボランティアネットワークの構築等)
- 集落組織等による棚田の保全・利活用活動への直接支援(経費助成等)

今号のTopicsは、前号でも取りあげたOECD(経済協力開発機構)の日本会合のレポート。棚田が世界からも注目されつつあります。

Topics

去る9月22日から26日にかけて、ライステラス第7号でもお知らせしたOECDによる棚田調査が予定通り実施されました。OECDは、日本のほかEU諸国や北米、韓国など29ヶ国が加盟する国際組織で、「先進国クラブ」ともいわれ、毎年7月頃に開催されるサミット(主要な国首脳会議)に向けた意見調整のほか、経済・開発協力、環境政策等の重要な問題に関する世界の政策方向をリードしていく役割を果たしています。

農村地域開発プログラム(Rural Development Programme)は、OECD事務総長官房の直轄プロジェクトとして開始され、農村地域の「千枚田景勝保存基金」、奈良県紀和町における「丸山千枚田条例」や石川県輪島市における

理理会合では、日本から三重県紀和町における「丸山千枚田条例」や石川県輪島市における

活性化について検討を行っています。

今回の棚田の調査は、緑豊かな農村景観、長い歴史の中で形成された文化や伝統などの「農村アメニティ」に関する研究の一環として実施されました。RDPでは1993年より、「農村アメニティ」の特質とは何か、なぜ保護だけでなく、いかに経済的なものにつなげていくかなどの課題が指摘されました。

今回のRDP理事会は、アジア・モンスター地域では初の開催でしたが、参加者は棚田をはじめとする水田地帯の素晴らしい景観・文化等に触れ、その保全の必要性について理解を深めていました。

明日香村の「棚田オーナー制度」などの実態を例にして、日本では農村アメニティに相当する「風土」というものがあり、コミュニケーションレベルでの濃密かつ連携のとれた取り組みのことが特徴という旨の報告がなされました。

OECD(経済協力開発機構) 農村地域開発プログラムで 日本の棚田の調査が

——第13回理事会会合、
ワークショップ及び現地調査報告——

23日にはOECD加盟国、大学、官公署関係者約120名の参加の下「農村地域のアメニティ政策」に関するワークショップが開催され、さらに24日から26日にかけて、石川県、大分県並びに奈良県で棚田等の現地調査が行われました。

26日の現地調査に引き続き開催された総括討議では、わが国の農村アメニティに関し「歴史文化の深い関連性と文化的行事などを通じた地域コミュニティの強化」など、その特徴を取り上げられるとともに「いかに若い世代に継承していくか」「單なる保護だけでなく、いかに経済的なものにつなげていくか」などの課題が指摘されました。

全国棚田(千枚田)連絡協議会 会員募集中

お申し込み・お問い合わせは、協議会事務局
佐賀県西有田役場農林商工課まで

佐賀県西松浦郡西有田町大木乙2202
TEL(0955)46-2111 FAX(0955)46-2100

編集後記

今号から編集者が、木村美江から石井里津子にかわりました。どうぞ、よろしくお願い申しあげます。さらなる情報発信の場としてのライステラスをみなさまと一緒につくりあげていきたいと思っております。知りたい情報、寄稿などどうぞ編集部にご連絡ください。

ライステラス編集部
ふるきやらネットワーク
〒169 東京都新宿区百人町1-23-29-202
TEL 03-5389-9937 FAX 03-5389-9983

新しく会員になったみなさま

個人 岐阜県 柚植 順
埼玉県 加藤心一
大分県 浅井幸一
千葉県 関 正勝

●賛助会員

東京都 仲野白衣
福岡県 鶴木久義
東京都 山下順吉
岐阜県 小板清治
岐阜県 鈴木英幸
岐阜県 柚植弘成
岐阜県 平井 茂
(敬称略・順不同)

●正会員

<自治体>熊本県矢部町 町長 甲斐利幸
佐賀県多久市 市長 横尾俊彦
高知県香北町 町長 野島民雄
大阪府能勢町 町長 辻 靖隆
長崎県南有馬町町長 松尾義博
兵庫県加美町 町長 森野義史
新潟県高柳町町長 樋口昭一郎
奈良県明日香村村長 関 義清
<団体>岩手県土地改良団体連合会
岡山県土地改良事業団体連合会
佐賀県土地改良事業団体連合会
全国土地改良事業団体連合会
熊本県経済農業協同組合連合会
恵那先史文化研究会
鹿児島県土地改良事業団体連合会
(株)高崎総合コンサルタント
グリーン長野農業協同組合

理理会合では、日本から三重県紀和町における「丸山千枚田条例」や石川県輪島市における

（農村環境整備センター）

石坂 邦美